

アマチュア天文研究発表大会(札幌)の記

下 保 茂*

運営委員会の発足

1967年川崎で第1回を開催した日本アマチュア天文研究発表大会——通称アマ天大会——は、本年で第9回を数える。第2回を1969年再び川崎で開いた後は、毎年場所をかえて諏訪、仙台、明石、川崎、岐阜、諏訪とつづいてきた。私は幸い毎回傍聴することができた。

1976年は海を渡って札幌天文同好会が主催し、札幌市真駒内の北海道青少年会館で9月19日に開催された。

アマ天大会は第1回から第8回までは、順ぐりに各地のアマチュア天文愛好家の団体が主催し、主催団体以外は自由に各個人が参加し、外にはこれを全国的に統一して推進するような団体はなかった。その土地の主催団体の自主的な運営進行にまかされてきたのである。このやり方は、それなりにアマチュアの特権である他からの制肘束縛なしに行動できるというよさがあるが、回を重ねるにつれて、実際の運営について不便なことができた。それは会の永続性が不確実なこと、つまり次の回をどこにするかをきめる責任があいまいであること、毎回主催者が変わるので、対外的な責任の所在がはっきりしないことなどである。

—昨年諏訪の大会で、これらの支障を取除くために運営委員会の設置が提唱され、昨年2月15日の発起人会を経て運営委員会の規約がきめられ、今回の札幌大会で承認された。それによると運営委員会は日本アマチュア天文研究発表大会の企画運営をはかることを目的とし、全国的分布で、任期2年の委員をおき、次期開催地の選定や賛助会員の交渉を行なうが、実際の大会開催は各地の天文同好者の会の自主的な進行にまかせられるというものである。各地で連絡につごうのよいと思われる委員25名が選ばれ、委員長には森久保茂氏が選ばれた。つまり1976年の大会は運営委員会が発足した最初の大会



* S. Kaho

である。

真駒内の会場にて

会場となった北海道青少年会館は、冬期オリンピックのプレスセンターであった所である。丘の斜面の林の中の建物で、講堂といくつかの会議室、宿泊施設のそろった便利な場所であった。ここで札幌天文同好会の福島久雄会長、林耕助、後藤栄雄、大場与志男の諸氏ら多数の同好会員のお世話になった。

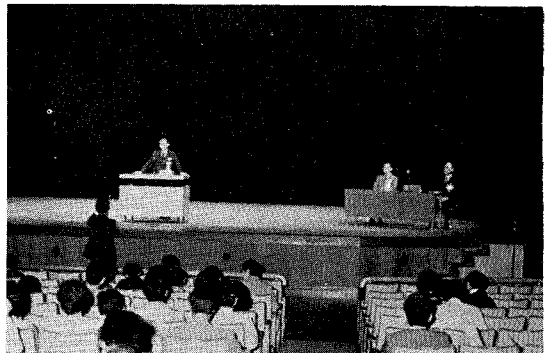
この同好会の歴史は古く、大正13年の創立で、戦中、戦後の一時期の中断があり、昭和31年再発足し、この年が満20年という記念の年だそうである。

大会の前夜の18日夜運営委員会がひらかれ、来年度は宇都宮で大会を開催することなどが決められた。終って前夜祭としてスライド映写や数十名の参会者の自己紹介などがあり、にぎやかな歓談がくりひろげられた。

大会当日は9時30分より開会式で、福島札幌天文同好会会長の開会の辞、森久保運営委員長、札幌市教育長の挨拶の後、12の研究発表がなされた。発表の概略の分類は、観測の報告や整約に関するもの7名、天文学史、星と民俗に関するもの4名、一般的な天文の問題に関するもの1名で、中には北海道の隕石やアイヌ人の天文観、札幌農学校の有名なクラーク博士が若い頃は熱心な隕石の研究者であった話など、地方色豊かな発表もあった。

この間昼食後約1時間特別講演として長谷川一郎氏の“飛鳥の占星台”の話があった。16時30分から30分間分科会として彗星、星食、天文史、太陽と日食、惑星、天体写真、流星と流星塵の7つの部屋に分かれて討議懇談がなされ、終って講堂にもどって分科会の世話役から概要の報告があった。夜は食事をしながらの懇親の会で、毎回ながら楽しい語らいがつづいた。

今まで何回かのアマ天の大会を通じ、プロの学会と異

写真左 集合写真
右 講演風景

る特徴としては次の点があげられるのではないかと
 思う。(1) 肩ひじのはらない楽しい雰囲気での交流、(2)
 研究発表もプロの天文学会の研究発表と同種のもの外
 に、天文の周辺分野、専門にとらわれない広い見方、天
 文教育、天文器械の考案などに特徴がある、また大会の
 開催される各地の同好者との交流や、その土地の天文的

風土に接することができるのも得がたいことである。観
 測についても、何をどんな風にやるかについて、他人の
 経験をじかに聞くことは、とかく一人の殻に閉じこもり
 がちなアマチュアにとって有意義なことと思う。この意
 味で、分科会は恰好の場を提供するのであるが、もう少
 し分科会に時間をとってほしいとの声もあった。

雑 報

こぎつね座新星 (Nova Vul 1976) その後

先月号の雑報及び今月号の表紙写真で見ると、こ
 ぎつね座に出現した新星は、発見直後から各地で観測が
 おこなわれている。C.Y. Shao により、ハーバード天文
 台の 155 cm 鏡で撮影された乾板から次のような精測位
 置が発表された。

$$\alpha = 19^{\text{h}}27^{\text{m}}04^{\text{s}}.06 \quad \delta = +20^{\circ}21'43''.3 \quad (1950.0)$$

なお、Shao によるとパロマー写真天図の青光色での
 写真に約 18.3 等の恒星があるという。東京天文台でも、
 今月号の表紙写真の原板をパロマー写真天図と比較した
 ところ、Shao と同じ恒星と思われる星を同定していて、
 パロマー写真天図の赤色光での写真と比べると、青色の
 強い星のようである。

各地で光度観測がおこなわれているが、東京天文台
 (三鷹) 及び、岡山観測所で光電測光や分光観測がおこ
 なわれていて、その初期値は次のとおりである。

U.T	V	B-V	U-B	
	等	等	等	
10月 22.49日	7.07	1.38	1.00	岡山
25.44	7.17	1.23	0.23	三鷹
26.53	6.88	1.24	0.31	岡山
27.56	6.63	1.18	0.11	三鷹
29.43	7.03	1.09	0.08	三鷹
31.47	6.91	1.10	-0.10	三鷹
11月 1.52	6.56	1.21	0.12	三鷹

表紙に示したスペクトル写真は、対物プリズムによる
 ものの密着焼付けなので細部を知ることはできないが、
 岡山での観測によれば 10月 22日にはまだ輝線が弱く、
 10月 25日には強くなっていて、スペクトル型 F2 の超
 巨星に似たプロファイルを示している。

東京天文台に発見の連絡が国際電話で入ったのは 10
 月 22日 5時 (U.T.) で、22日 13時 (U.T.) に改めて
 発見電報が到着した。この電報の末尾には、リック天文
 台の Harlan と Phillips によるスペクトル観測によると
 極大に近いという一文が付け加えられていた。

Alcock による発見が 10月 21.764日、リック天文台
 での観測が 10月 22.2日、東京天文台の観測が 22.5日
 であり、発見・通報・連絡・観測という流れが非常にス
 ムーズにおこなわれた好例ではないかと思う。

上の光電観測の結果を見てわかるように、一応極大を
 過ぎたと思われるころ再び光度が上昇し、11月には発見
 時にほぼ等しい光度にまで達している。

このことは、京大理学部の上松赤外線観測所でもとら
 えられていて、Kバンドによるフラックスの値は、10月
 26日: $3.3 \times 10^{-16} \text{ w/cm}^2 \mu$ 、10月 30日: 2.2、11月 1
 日: 2.6、11月 2日: 3.9 と観測されている。

過去に出現した新星の中に、極大後に光度が上下した
 ものとしては DQ Her (Nova Her 1934) などがあり、
 今度の Nova Vul 1976 も典型的な Slow Nova ではな
 かるうか、 (1976 Nov 9, 香西洋樹)

1976年10月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	3,	12	6	3,	11	11	—,	—	16	—,	—	21	2,	7	26	—,	—
2	—,	—	7	3,	8	12	2,	2	17	1,	14	22	4,	8	27	2,	30
3	3,	8	8	1,	1	13	2,	4	18	3,	28	23	2,	21	28	—,	—
4	3,	9	9	—,	—	14	—,	—	19	3,	11	24	—,	—	29	2,	9
5	3,	6	10	1,	1	15	2,	24	20	—,	—	25	2,	26	30	1,	4
(相対数月平均値: 23.7)															31	0,	0

昭和51年12月20日 発行 人 〒181 東京都三鷹市東京天文台内 社団法人 日本天文学会
 印刷発行 印刷 所 〒112 東京都文京区水道2-7-5 啓文堂 松本印刷
 定価 300円 発行 所 〒181 東京都三鷹市東京天文台内 社団法人 日本天文学会
 電話 武蔵野 31局 (0422-31) 1359 振替口座 東京 6-13595